　付き添ってきた神官騎士達を外に待たせたまま、エイミナムはベッドの上で四つん這いになったアステリアへと容赦なく腰を突き入れていた。

「んほおおおおお〜〜っ♡　おっ、おっ、おおお〜〜っ♡　気持ちいい〜っ♡」

　神官服はほとんど脱げて全裸に近い状態になったアステリアは、白目をむきながら至福の笑みを浮かべていた。

「こ、後輩にぃぃ♡　オマンコほじほじされてっ……んっひいいいいい♪　チョー興奮してオマンコしまっちゃいましゅううううっ♡」

「うっ……っくううう……こ、この変態！」

　知能がすっかり低下して快楽に狂った雌となったアステリアの尻に、エイミナムは容赦なく平手を打つ。

「あっひいいいいいい！」

　ばちぃん、ばちぃんと小気味の良い乾いた音が響くと、アステリアは涙を流しながら悦びの声を上げる。

「エ、エイミさんっ！　もっと……もっと乱暴にっ！　聖職者の風上にもおけない、おバカでエロくて下品な言葉で、もっと私をいじめて下さいっ」

「うあっ……あああああああっ！」

　アステリアを突いているエイミナムも上等な司祭服がすっかりはがれており、ほぼ全裸状態である。その豊かな胸にはテープのようなものがまかれており、乳首の部分には振動する卵型の玩具――リュシリーヌ姉妹との行為でアステリアがそうされていたように、「ローター」が固定されていた。

「エ、エロ神官！　このビッチ！　旦那様がいるのに、女同士で浮気ばっかりする最低オマンコ女！　こんな女を最高の先輩だと思っていたなんて！」

　バチン、バチン！と何度も何度も平手を繰り返すうち、アステリアの臀部にはエイミナムの赤い手形が増えていく。

「うっ、あああっ！　し、振動が強く……っあああああ！」

　するとエイミナムの興奮に連動するかのように、乳房にまかれているローターの刺激が強まっていき、乳首を刺激されているエイミナムはびくびくと身もだえる。

「っふふ、どうですかエイミさん。私もそれを使って、女の子を犯しながらイケるようになったんですよ。どんな感じなのか口に出して、何度も何度も繰り返してみて下さい。きっとエイミさんもイケるようになりますよ♡」

　アステリアが自己の体験を通してエイミナムに訴えかけると、エイミナムは再び腰の打ち付けを開始しながら

「あああああ……♡　気持ちいいっ♡　これ……気持ちいい♡　乳首気持ちいいです、先輩っ♡」

「先輩じゃありませんっ！　変態オマンコビッチレズ女です！」

「ふ、ふおおおおおおおっ♪　へ、変態オマンコビッチレズ女ぁぁぁぁ！　気持ちいい、気持ちいい！　乳首、気持ちいいっ♡　この変態ビッチのレズオマンコをずっこんばっこんするの気持ちいいのおおおおっ♡」

　アステリアに先導されるように、エイミナムは今までの自分の人生で見たことも聞いたことのないような言葉を連呼しながら、アステリアの腰を両手で固定して、ガツガツと激しくディルドーをピストンさせる。

　その激しい腰使いにアステリアも発情しており、結合部からはグチュグチュという卑猥な音とともに愛液が飛び散ってシーツにしみこむ程だった。

「おっほおおおお〜〜♡　そ、そこぉっ♡　奥をゴリゴリされるの気持ちいいですっ、エイミさんっ♡　んほっ、んほっ♪　んほおおおおっ〜〜♡」

「こ、ここ？　ここがいいんですか？　ほらほらほらっ！　もっとオホ声上げろ！　もっと私を幻滅させて興奮させなさい！」

　頬を赤らめながら、アステリアの尻を何度もバチンバチンと叩くエイミナムは、その表情に嗜虐の笑みを浮かべていた。腰を深く突き入れながら、ディルドーの先端部分でアステリアの最奥をゴリゴリと押しつぶすように責める。

　するとアステリアも腰を、円を描くように卑猥にくねらせながら膣を締め付けて、本物の男性器から精を絞り取るがごとく、ディルドーに絡みつく。それは決して本物の男性器ではないため、エイミナムがその快感を得ることはないが、しかし乳房のローターがアステリアの興奮と連動して、激しく振動していく。

「んひいいいいいい〜〜っ♡　乳首、乳首、乳首っ♪　気持ちいいっ♡　乳首気持ちいいっ♡　このレズビッチ女のエロマンコが興奮するのに合わせて、激しくなってるううっ♡」

　すっかり汚い乱暴な言葉使いになったエイミナムが、だらりと舌を伸ばしただらしない

表情を浮かべながら、夢中になってひたすらアステリアを突きまくる。

「んひょおおおおお〜〜っ♡　雄みたいにレイプしてくるエイミさんのレズチンポ、ヤバ過ぎですうっ♡　もうイク♡　イキそうっ♡　後輩にバカにされてイクっ♡　最高に気持ちいいレズアクメくるっ♪　エイミさんもイケそうですか？」

　心の底から嬉しそうに、幸せそうに笑いながら、後ろから犯してくるエイミナムへ振り向くアステリア。

「ぜえ、ぜえ……はぁー……はぁー……イ、イケそぉ……もう少し……もう少しでイケるっ……変態エロマンコをレズチンポで犯して、イケそぉっ……♪」

　汗だくになりながら激しく振動するローターの快感に身を任せ、エイミナムはアステリアを絶頂に追い込みながら、自身の頭の中も絶頂することで一杯になる。そうしてお互いに興奮と快感を高め合うと、エイミナムにつけられたローターはただ振動するだけではなく、自律して動き始めて、彼女の乳首を押しつぶすように圧迫しながら震え続ける。

「んほおおおおおおお〜〜っ！？　だ、だめっ……ロリデカパイっ……感じるっ♪　もうダメ！　イク♡　もうイク♡　イクのっ♡　目覚めるっ♪　レズに目覚めるっ♪　あこがれの先輩犯してイッたら、もう女の子イカせるの癖になるっ♡」

「おおおおおおおおっ♡　目覚めて下さいっ♡　女同士に目覚めて、これからたくさんノンケオマンコをレズマンコに堕としていきましょう、エイミさんっ♡　そうっ、そうですっ♡この腰使い……さいっっっこう♡　あ、私もイク♡　一緒に、イキましょうっ♡　エイミさん、イク♡　レズオマンコ、イキますっ♡」

　パコパコとお互いに腰を動かして激しくぶつけながら、２人とも雌の表情になり果てた蕩けた顔でクライマックスへと向かっていく。

「んおおおおおおっ♡　い……イケっ♡　この変態エロ神官っ♡　イケイケイケイケっ♡　雑魚マンコイケっ♡　わ、私も……も、もお……もう無理っ……♪」

「お゛あ゛〜〜〜〜……お゛〜〜〜っ……♡」

　野太いアステリアの喘ぎ声と、感極まったような限界を迎えたエイミナムの激しい声。肉がぶつかり合う音に重ねられながら、２人は同時に最高の瞬間を迎えて――

「「イク、イク、イクうううううう♡　レズセックス気持ちいいいいいいいいいい♪」」

　同時に女同士の快楽を叫びながら、最高に気持ちいい絶頂を迎えてしまう。

「あ……か……う、ううううう……ううううう……ま、待って！　乳首やばいやばいやばいや

ばいやばい！　と、止めて！　んほっ……♪　お゛っ、イグっ♡　イッてる♡　気持ちいいの、続いて……っほおおおおおお〜〜……♡」

　アステリアを犯した後も振動を続けて執拗にエイミナムへ快感を与え続けるローターに、エイミナムはアステリアの覆いかぶさりながら白目をむいて、何度も何度も絶頂を繰り返す。

「ふーっ……ふーっ……あ゛〜……エイミさんっ♡　気持ちいい、気持ちいい……マジで気持ちいいですぅ♪」

　アステリアはアステリアで、失禁しながらマゾの快楽の炎に理性を焦がし、正気を失った瞳でぶつぶつとつぶやいていた。

　そうやって頭が真っ白に何も考えられなくなった２人は、それでも時間と共に少しずつ理性を取り戻していく。お互いの荒い息遣いが重なり、２人して脱力してベッドの上にぐったりとする。

　そのまま数分間沈黙が続いた後、どちらの口から発せられたのかは定かではない。或いは２人同時だったのか

「も、もっと……もっと、もっとヤリまくりましょう♡」

　快楽に狂った２人の雌の行為は、表に神官騎士を待たせたまま、その後実に２時間以上にも及ぶのだった。